

Q3

青少年が自立するための多様なセーフティネットを どのように形成するのか

問題の背景と 解決の方向性

見失った居場所を社会的な
関係の中で取り戻すために
自立へ向け支援する。

仕事に就かず、進学も職業
訓練もしない若年層「ニート」
に対する社会的な関心が高ま
っている。ニートとは、Not in
Education, Employment, or Trainingの略
で、英国で生まれた言葉である。199
0年代、英国の若者の就業意識低下に対
する労働政策に用いられた言葉で、「職

に就いておらず、学校などの教育機関に
も属しておらず、就職活動もしていない
15歳〜34歳の未婚者」と定義されている。
いわゆる「ニート」の状態にある若年層
について国の厚生労働省は全国で約64万
人(2005年)、また同じく内閣府では
84万7千人(2002年)存在してい
るとする。さらに第一生命経済研究所の予
測によると全国におけるニートは201
0年には98万4千人、2015年には1
09万3千人に達するといふ。



若年層が働く意志を持っている限り、
労働人口が過剰なことから発生する従来
的な意味での「失業問題」は、近い将来
かなりの確立で解決されるはずだ。生産
年齢の人口割合が中長期的に減少し続け
る社会が訪れつつあり、逆に労働力不足
のほががこれからの日本にとって重要な
問題になるだろうと考えられるからであ
る。そうである以上、働く意志をなか
か持てない、それゆえに仕事のスキルも
未熟なまま年を経てゆく若者達が増加し
ていくのだとしたら、それは私たちの社
会の存立の根幹に関わる問題だろう。

一方で、若年層の自立の問題を、経済
と労働力の問題にのみ還元して良いのか
という議論もある。学ぶことや働くこと
を通じて社会的に自立していくことは、
一人ひとりの心のありようや生き方を規
定してしまう重要な問題だからだ。

横浜市でも、これまで青少年相談セン
ターが引きこもりや不登校の青少年への
相談活動を行うなど、「働く・学ぶ意欲
を持たない若者たち」の問題には取り組
んできた。

もっとも、青少年が自分とは何か、
とか「将来何をすべきか」と悩み、社
会から一定の距離を置く猶予期間を持
ち、自分自身のアイデンティティーを確
立することは思春期・青春期においては
当たり前のことである。問題なのは社会
との関係を断ち切ったまま、猶予期間が

長期化し、無気力状態に陥った上で、
それが慢性化してしまうことだ。

青少年相談センターによると、「一般
的に「不登校・引きこもり」は、「いじめ」
「孤独感」、「家族や周囲からの過度の期
待」など、本人を取り巻く様々なストレ
スが増大し、昼夜逆転する状況が続き、
無気力、いろいろな状態が現れるところ
からはじまるという。そして、本人が
持つストレスを家族にも話さず、ひた
すら自分で抱え込むことで、長期的な
無気力状態に陥っていくが、引きこも
ることで、周囲のストレスから回避し
て仮の安定を保っている。回復への契
機は、まず家族が、本人が迷い、悩むの
も一つの道」と状況を理解し、本人を支
え、味方になること。さらに本人が少
しずつ達成できるような、社会参加への
現実的な目標」を設定するなどして、社
会への窓を開き、居場所の確保」や「仲間
の再発見」に導くことだ。

「ここでは、青少年が悩んだ末、仮に
一度は、不登校や引きこもり」になり、
社会の中での居場所を見失ったとして
も、再び社会的関係の中で、学ぶこと
や「働く」ことを通じて自立することを
支援するための取組みを紹介する。

A 若者が、自らのラ
イフスタイルに適
応する形で、多様
な世代と交流できる居場
所を確保し、実体験を通
じて社会の中で働くこと
を学んでいく。

TRIAL-1

横浜総合高校の取組み

多様な若者達の

意欲と生活スタイルを支える

新しいタイプの定時制高校

学校がもう一つの「家庭」の役割を果たす

現在の青少年の問題を考える上で、「新しいタイプの定時制高校」の存在は選択肢のひとつだ。従来までの勤労青少年の学びの場という役割はほとんどなくなり、生徒の多様な生活スタイルや興味・関心・進路希望等に応じて、生徒が意欲的に学ぶことのできる高校がもたらわれている。そこには様々なストレスによって、一度、学校(社会)との関係を断ち切った青少年が、引きこもらずに、社会との関係を再度、取り結んだ例もある。

このように青少年の暮らしの有り様が多様化する時代の新しいタイプの高校として注目されるのが平成14年に発足した横浜総合高校だ。横浜総合高校の特徴は、従来までの夜間だけでなく、午前・午後・夜間の3つの部からなる三部制を敷いていることだ。生徒は自分のライフスタイルに応じて、所属する部を選択することができる。また単位的なため、必修科目は自分の所属する部で受けるが、選択科目の授業の時間帯は自由に選択できるのも特徴だ。たとえば、夜中にコンビニでバイトして、午後の部と夜間の部の授業を受けるといった時間選択も可能なのである。

さらに必要な単位数さえ取得できれば、従来の定時制高校のように4年間でなく、3年間で卒業できる仕組みになっている。

ある意味で、今の時代に適應できる柔軟な学び方のできる高校なのである。1年次の生徒数は、Ⅰ部105名、Ⅱ部105名、Ⅲ部105名で、4学年あわせて1000名余り。1クラス20名の少人数制を敷いて、生徒相互のコミュニケーションや教師と生徒の相互「コミュニケーション」を重視している。

「この学校の生徒は全日制の生徒と比べて本当に教師によく悩み事を相談に来る」と語るのは、大森副校長だ。家族の事や友人関係、就職・アルバイト先での人間関係から生活費や学費の問題まで、相談事は多岐にわたるといふ。このように生徒と教師の関係が通常の高校では考えられないくらい親密であり、学校がもう一つの「家庭」の役割を果たしている側面もある。また深刻な悩み事にはカウンセリングの専門家が対応する体制もできている。

総合高校なので、カリキュラムは、エンジニア系(情報・電気・機械等)、ビジネス系(簿記会計、国際経済等)、生活文化系(デザイン・服飾・調理等)など幅広く充実している。加えて、すし職人や洋裁職人などの横浜マイスターを学校に招いてその技を間近に見学したり、地元の企業や社会福祉施設を訪問するなど職業体験を重視しているのも特徴だ。地域社会の中には、様々な仕事と働き方があることを生徒に実感として理解してもらったためだ。

平成16年度の卒業生の進路先は、卒業生数130名余のうち大学進学20名、短大11名、専門学校42名、就職21名、その他36名(前職継続、受験準備等)。この学校の卒業生たちの人生の進む道の多彩さが、横浜の青少年に対してこの学校の果たしていく役割を物語っている。

TRIAL-2

『フリースクール・楠の木学園』の取組み 不登校児の自立を目指した フリースクール

子どもたちの自信を回復させ コミュニケーション能力をつける

小机にある楠の木学園は、「発達障害」の子どもを持つ親たちの会が(株)ヤマタネの支援を受けて1993年に発足した。現在は「発達障害」を持った子どもたちだけでなく、既存の学校では十分な対応が得られず、不登校や引きこもりになっ

てしまった中学生以上の年齢の若者たちも多く通うフリースクールだ。当初は、企業が場所の提供から、校舎の整備、運営費の補助などまで行っていたが、発足してから3年ほどで、パブルの崩壊を期に、企業が支援を打ち切り、現在は、NPO法人として自立し、生徒が支払う入学金と授業料、そして後援会からの支援などによって運営されている。

中・高校生年齢を対象とした本科(3年間)と本科の卒業生に対してより実践的な社会参加のプログラムを提供する専

攻科(2年間)の二つのコースが基本になっているが、毎日の通学が負担になる生徒のためには、「単科」として、希望する授業だけに参加できるコースも用意されている。

授業内容は、国語・英語・数学・社会など、一般教養の授業のほかに、芸術・表現活動を重視した音楽・和太鼓・朝鮮太鼓・美術・演劇などの授業があり、またグループワーク・ホームルーム・クラブ活動など、社会性を培う授業が重視されている。

学園の運営に関わる専任スタッフは6名。臨床心理士として生徒へのカウンセリングの対応をしながら、和太鼓を教えるスタッフ、シユタイナー学校体育教師の免許を持ち、体育はもちろ

ん、技術から調理、大道芸まで教えるスタッフがいるなど、多士済々で一人で何役もこなすスタッフが揃っている。生徒の多くは、小学校から中学校までずっと「ダメな子」「何もできない子」「何をやっても足手まといの子」などと言われ続け、「どうせダメなオレ」「わたしなんか、何をしたらうまくいかないにきまっている」と諦観と無力感を抱いて楠の木学園にたどりつくというのが一般的だといふ。こうした生徒たち

にまず自信を回復させるのが、楠の木学園の教育の第一歩である。そのために、一人ひとりの生徒の個性に応じて、多様な可能性への挑戦と様々な分野に触れることができるようなカリキュラムを提供する。たとえば、大道芸の授業、皿回し、ジャグリング、フリスビー、綱渡り…。これらは、こ



楠の木学園の授業風景

演劇、音楽など、他の教科においても見られる。

コミュニケーション能力を養う

この学園がもう一つ大切にしているのは、他者とのコミュニケーション能力だ。生徒たちのほとんどが、毎日の生活の中で、あいさつができない」「自分の話したいことだけをいう」「話しを聞いているのか、いないのか反応がない」など、他人とコミュニケーションをとるのが難しい状態で入学してくる。

教科の授業は、生徒達の理解度にあわせて3つのグループに分かれて行われる。グループの人数は4〜5人。決まった教科書やカリキュラムの枠があるわけではないため、授業や教材はグループの生徒の個性に応じて組み立てられる。

これまで学校で出会ったことのないものである。最初は、みんな尻込みするが、そんな中で誰かができるようになると、周囲の雰囲気が一変する。生徒たちの心の中には実は、できることなら自分もできるよになりたいといった切実な願いがある。だからできた時の達成感となり、それによって「自分はダメだ」という頑な思い込みが突き崩されていく。こうした自信回復に向けた好循環が大道芸に限らず、和太鼓、朝鮮太鼓

しかし、授業を軌道に乗せるまでが大変だ。授業が始まると机に顔を伏せて寝てしまう生徒やいきなり教室から出て行ってしまふ生徒など、同じグループの中でも入学当初は、様々な反応を生徒が見せる。だから英語の授業などでは、いろいろなゲームを取り入れながら学習活動

を展開させる。ゲームをするには、「順番を守る」「自分だけ勝とうとしてスルをしない」「負けても泣いたり怒ったりしない」といったマナーが求められる。そのため、ゲームのルールを守ることや、友達と一緒に取り組みながら良い関係をつくるなどの社会性を身につけていくのである。それは、和太鼓の授業中、みんなでリズムを取り合いながら演奏することや演劇の授業で一つの舞台を創っていくことを通しても学びとられていく。

学園を取り巻く地域とのコミュニケーションも生徒にとつて重要な学びの場だ。地域の秋祭りには、学園の生徒が毎年参加。その過程で地元の人たちが、学園の生徒のためにオリジナルな「みこし」を創って提供してくれるというような関係も構築された。また、週に1回、隣接している地域ケアプラザで喫茶店を開き、ケアプラザに通ってくる高齢者とのコミュニケーションが図られている。さらに区内の福祉や市民活動団体のイベントには積極的に参加し、生徒たちが大道芸などを披露して好評を博している。

こうした学園内外の他者との交流を通じて養われたコミュニケーション能力は、専攻科での職場実習を通じてさらに磨きがかけられる。農業、織物・染色、お菓子づくり、部品組立て、配送などの仕事を通じて、人と人との関係の中で働くことの意味を確認していくのである。こうした社会体験を通じて、学園に通いながら通信制高校の単位を取得し、大学受験を目指して入学後の学費を稼ぐため、夜は働くという生徒も育ってきている。

TRIAL-3

「ヤングジョブスポットよこはま」の取組み
就職先に悩む若者の
自立支援

悩みを抱え込んだ若者の
硬直した心と体を
ほぐすことからはじまる自立

フリーターなどの不安定就労の若年者を対象にして、職業紹介をしたり、職業相談にのる施設・機関が市内でも増えている。30歳未満の就職希望者に対して求人情報の紹介や職業相談を行う「よこはまヤング・ワーク・プラザ」(国)や就職活動に対して悩みを抱える若者(概ね34歳まで)に対してキャリアアカウンセリングや職業適性診断などを行う、かながわ若者就職支援センター(神奈川県)などである。

特に横浜駅西口から徒歩5分の場所にあるヤングジョブスポットよこはまは、未就労者の中でも、就職のために何をしたらよいかよくわからなかったり、なかなか就職活動がうまくいかないという若者たち(35歳未満)が「働く」とはどういうことを体験的に考えられる場所だ。2003年7月1日に開設。運営主体は、独立行政法人雇用・能力開発機構 神奈川センターであるが、NPO法人「楠の木学園」と委託の形で協働運営しているところがユニークな点だ。

事業の大きな柱は3つ。

① 個々の利用者の就職することの様々な悩みに関する相談事業

② 職業人としての必要な考え方や知識やマナーを先輩の職業人を交えて話し合うフォーラム事業

③ 実際に様々な職場に出かけて見学・体験を行う職業ふれあい事業

原則として火曜日・土曜日までの午前11時15分～午後7時まで開館。利用者は1日平均で約50名、月平均にすると約1000名の利用者がある。

まずヤングジョブスポットに足を踏み入れて驚くことは、民間の貸しビルの一室(約150㎡程度)の空間が、相談者とスタッフとの会話と活気に満ち溢れていることだ。神奈川センター所属のキャリアコンサルタントを配置した相談コーナーはあるが、むしろ利用者とスタッフが居るのは、休憩コーナーを兼ねた中央のフリースペースである。それも就職の相談というよりも、気の置けない友達同士が談笑し合うといった感じで相談活動が行われている。



この場のジョイフルでフレンドリーな雰囲気は、「アテンダント」と呼ばれるスタッフによって醸成されていると責任者は言う。アテンダントは約20名、交代で毎日7名が常駐している。アテンダントは年齢もキャリアも多士済々だ。上場企業の社長だった人や外資系銀行に勤務している人、出版・広告会社の企画営業職、留学カウンセラー、障害者施設の職員から農業職、造園職、等々。

アテンダントに共通しているのは、今の時代に「仕事をすること」を悩める若者と一緒に考えるという姿勢だ。だから、アテンダントは、相談に来る若者に命令したり、自分の考え方を押し付けたりはしない。利用者の話をじっくり聞いて、利用者の就労に対するやる気を惹起したり、利用者が自分の考えを整理することのアドバイスに専念するのである。そして、利用者が自らのキャリア形成についての方向性がある程度見出した段階で、センター所属のキャリアコンサルタントに仲介する。「就労することについて悩みを抱え、それによって周囲から精神的なプレッシャーをかけられ続けた若者が、いきなり相談を受けても、なかなか出口は見出せない。まず利用者の気持ちと体をほぐすこともアテンダントの役割の1つでもあり、ヤングジョブスポットの特徴でもある」とチーフマネージャーは言う。

様々な仕事のプロの話聞き参加者が意見交換をする「フォーラム事業」もなかなか密度が高い。「働く前に自信をつけよう」プロとして成功するための7つのポイント、「相手の心をつかむ自己

PR」「働く前に知っておこう！ 労働法・社会保険・税金求人票や供与明細の見方」などの一般的な仕事に対する心構えやノウハウをテーマにしたものから、動物看護師、ブライダルコーディネーター、イラストレーター、イラストレーターなど、様々な職業人がプロの仕事術を語るものまで、毎日、日替わりで2時間の講座やワークショップが行われているのである。

このような相談事業やフォーラム事業を通じて、利用者の多くは自分の進路を見定めてヤングジョブスポットから巣立って行く。ただこの

場の居心地が良すぎて、いわゆる常連さん化したしてしまう若者も少数いる。「ヤングジョブスポットよこはま」そのものが悩める若者たちの「たまり場」的な場所だけになってしまふことにならないようにということだ。「ヤングジョブスポットよこはま」から外に出て、実際の仕事の現場を見学・体験しようという企画も行っている。水族館の飼育現場や古民家再生の建築現場、古民具のギャラリーショップなど、訪れる現



様々な職業人の仕事術をきく「フォーラム事業」

場は様々だ。たとえば、利用者が地元の農家の指導を受けて里山から竹を切り出し、陶芸家の指導を受けながら手づくりで作成した一輪挿しの花瓶を実際に伊勢崎町のアートスペースの協力を得てお客様に売ってみるといったプログラムも行っている。

チーフマネージャーは今後の抱負を語る。就職というゴールを目指して、試行錯誤を繰り返しながらも利用者と共に伴走を続けていきたい」と。